黒の勇者と白の英雄

あかつきいろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の勇者と白の英雄

【Ｎコード】

Ｎ１９３２ＢＡ

【作者名】

あかつきいろ

【あらすじ】

親友と帰宅している途中の主人公はとある神様の頼みで、自分のいる世界とは違う別の世界に行く事になり……。あまり無いと思う勇者と英雄のダブル出演です。こちらは投稿速度は遅いでしょうが勘弁して下さい。

ありがちな第0話

「勇者様と英雄様に敬礼！」

俺の目の前にいた大体五十人ぐらいの兵士達が一斉に敬礼してきた。もちろん勇者ってのは俺の事だ。っていうか英雄って様付けじゃ無くね？

ちなみに俺は輝宮黒谷（てるみやくろや）。英雄ってのは昔の俺の親友、白坂昭道（しろさかあきみち）だ。

「なあ、どうしてこんな事になったんだっけ？」

「それはずいぶんと前の事を思い出さなくちゃいけなくなるが、いいのか？」

「構わないから説明してくれ。ぶっちゃけ俺は来たばっかりだから、この世界の事とかよく分からんし」

「世界の事は後でゆっくり教えてくれる人がいるけどな。

とりあえず、御苦労さま。下がってくれていいよ」

「「ハッ！」」

兵士達が皆下がった後、俺達は喋りながら進み始めた。さて語るとしようか。俺がこの世界に来てから今日までの出来事を。

ありがちな第０話（後書き）

二作目とさせていただきます。面白ければよいのですが。

第1話：そして少年は告げられる（1）

俺は昭道と学校に帰る途中だった。俺達は高校一年で学校にも慣れて、面白くも無い学校生活を送っていた。

「クロ？訊いてんのか？」
「ああ悪い。それで何だって？」
「だからさ、今日の数学のさ……」

さっきから訊かされているのは、おもに昭道の愚痴だった。成績が良くないから、昭道は大体テスト前に俺に頼ってくる。俺は授業だけでしっかりカバーできるので、自学実習とかほざく大人は黙れと思っているほどだ。

『そこの君、ちょっと良いかな？』

「何か用か？神様」

俺の視線の先にいるのは、金髪の外人さん。これだけならまだありえない事じゃない。でも神様はさっきから空中を浮いているんだ。会って喋るようになって以来、俺はこの人を神様と呼びこの人は――――。

『まあまあ、良いじゃないか。勇者の卵君は忙しい訳じゃないでしょ？』
「そりゃそうだけど。でも、それとこれとは――――」

関係がない。と言おうとしたがその言葉を言う前に、神様に言われてしまったのだ。何をかって？もちろん、異世界移住宣告をさ。

『日常が楽しくないと思っている。そんな君には異世界への片道切符を上げるけど、どうする？』

第2話：そして少年は告げられる（2）

何言ってんだ？この人は。異世界への片道切符？そういう場合は大抵言われる奴が勇者とか英雄やらになっちまうだろ？
あれ、でもこの人俺を『勇者の卵』って呼ぶよな？って事は何？俺は勇者でしたってオチか？

「別にどっちでもいい」

「お？言うねえ。話をとりあえず訊いてくれるかな？そこの『英雄の卵』君と一緒に、さ」

俺が昭道の方を向くと、なんか瞬きしながらこっちを見ていた。あれ？神様の事見えてるのか？
俺が初めて会ったとき、他の人には見えないから。とか言ってたのに。しかもなんだって？『英雄の卵』？もう完全に意味分からなくなってきた。

「私はここ以外に、もう一つ世界を担当してるんだけどさ。そこに別の神が『魔王』を生み出しちゃったのよ。それで、私のお気に入りの子にお願いされちゃったのよ。『助けて下さい』ってさ」
「そんなもん自分の世界でどうにかすりゃいいだろ？何か特別な力を持つ奴に、それこそ勇者の装備的な物を用意してやれば。俺が出張る必要無いだろ？」
「それが出来たらこんな事は頼まないよ。私のお気に入りの子以外、極めて強い特別な力を持つ子がいないのよ。その点君はバッチリよ。特別な力を持ってる。
大体君は本当はこの世界で言う『魔王』だったのよ？でも、君の隣にいる『英雄の卵』君が友達になった事で、その運命は変わり君は

『勇者の卵』になったの」
「それは本当だったら俺は、昭道いやアキと闘う事になってたって事か？」
「そうだね。それで、どうする？向こうの世界では君を必要としている人がいるんだけど」
「それなら仕方ないか。行くよ。俺しかいないんだったらな」
「あの、神様。俺はまだ駄目なんですか？」
「君はまだ駄目。こっちの彼の方が早くに修業を始めてたから、完成度としてはこちらの方が高いのよ」
「そう、ですか」

アキは寂しそうな顔を浮かべつつも、次の瞬間には笑顔で振りむいた。

「頑張れよ。もしかしたら、俺もそっちに行くかもしれないからそれまで頑張れよ。クロ」
「当たり前だろ？お前こそ勉強なんとかしろよ？」
「それ言うなよ～。それでお前、彩香には言っていくのか？」
「その必要はないだろ？どうせ俺に関する記憶とかは消すんだろ？」
「まあね。君の情報が残ってると、この世界に歪が生じるしね。でも『英雄の卵』君からは奪わないよ。サービスだよ」

「それでいつ迎えに？」
「今夜零時に君の家の玄関先で。荷物とかまとめときなよ」
「そうする。お前はどうする？」
「もちろん見送りに行くよ。だから、頑張れよ」
「はいはい。それじゃ、とっとと家に帰るとしようかね」
「そうだな。それじゃあ神様、また後で」

「うん。バイバーイ。頼んだよ？『勇者』君」

そう俺に告げると、神様はスゥー、と姿を消してしまった。俺は家に帰るとアキに協力してもらいつつ荷物をまとめ始めた。

第3話：そして少年は旅立つ

「これで終わりっと。それじゃあ、ほい。この世界で最後の俺の料理だ」
「おお、旨そうだな。しかしお前の料理をこの世界で食うのもこれが最後、か。なんだか感慨深いよな」
「そうだな。お前があの時声をかけてくれなきゃ、今の俺は無かったけどな」
「声をかけたらとんでもない喧嘩になったじゃねえか。あれ、結構いたかったんだぜ？」
「仕方ないだろ？あの状況であんな軽い声をかけられなんかしたら、さ。それよりもとっとと食え。温かい内が上手い料理しかないんだぞ？冷めたら本来の旨みが無くなる」
「お、それもそうだな。早いとこ食わないと」

「それじゃあ、私もご相伴にあずかろうかな」

「……いきなり登場するのは止めてくれませんか？神様」
「ま、良いじゃん。ほら、早く食べようよ」

それから俺達は、喋りながら食事をつづけた。零時まではめちゃくちゃ速かった。それから俺は荷物をしまう作業に入った。

「この荷物を汝の中へ『黒影』」

俺の足元の影が伸びて、俺の前にあった荷物を全て呑みこんだ。呑みこんだとはいっても別空間に収納してるだけなんだけど。

「あ、君を送る世界はスキル制になってるから」

「スキル制？それってあれか？剣術〇〇レベル、とかそんな感じか？」
「そうそう。君は魔術のスキルがマックスの１００になってるから、魔術想像の能力（アビリティ）がつくよ」
「そりゃあ、ありがたいね。でも普段通り、俺の黒の力と名前でのみ発動するんだろ？」
「ええっとね、もう出来てる術だったら無詠唱でもできるよ。でも、新しい術は無理だから」
「了解。それじゃあ、行くとしようか」
「そうだね。準備は万端みたいだし、玄関の外に出て。もう出来上がってるから」
「わかりました。アキ、無いとは思うけどもし彩香が俺の事を覚えていたら、この手紙を渡してくれないか？」

「……わかった。でも、無いと思うぜ？」
「それでも、だよ。一種の希望だから」
「そうかい。確かに預かった」
「……ありがとう。それじゃ、じゃあな」

俺達が表に出ると、魔法陣が光り輝いていた。この光も他の人には見えない。見えるのは特殊な力を持つ者だけらしい。

「何？この光は……一体何なの？」
「彩香……。どうしてこの光が見えるんだ？いや、そんな事はどうでもいいか」
「ちょっと、どういう事よ！？クロ！」
「後の説明はアキに任せた。じゃあ、さようならだ。バイバイ、彩香。
――――我が翼、異なりし世界を飛ぶ力を与えよ。『黒翼』――――」

俺の背中から黒い翼が生えた。烏のような常闇の色。でも、綺麗な色。それを羽ばたかせ空中に浮いている陣に向かって飛翔した。

そして俺は、生まれてから１６年間育った世界を捨て、別の世界に飛び去った。

第４話：異世界に到着

俺が魔法陣を通り抜けた先にいたのは、青い髪に紅色という世にも幻想的な姿をした人だった。しかも格好が巫女服。

あれ？ここって異世界の筈だよねと思ったが、後ろの集団を見るとやっぱりそうだと思いなおした。だって武装した兵士の人が沢山いるんだから。

「あの」

「あ、はい。なんでしょうか？」

「あなたが神様が送って下さった勇者様ですか？」

「ええ、一応は。ところで、俺がここに召喚された理由が『魔王』の出現とか訊いたんですけど」

「はい、そうです。それがどうかしましたか？」

「あそこに見えるのは、言っていた魔物の類ですか？」

「え？」

俺と巫女さんの視線の先には、大量のいわゆるゴブリンと言う類の名前のモンスターがいた。うわ、リアルだとあんな感じなんだ。気持ち悪。

「そんなこんな所まで……」

「ちょっと失礼！我が身を守れ！『黒壁』」

俺の目の前に黒い壁が表れて、跳んできた流れ矢の一本を防いだ。さっきの武装した兵士の皆さんはすでに戦闘を開始していた。

俺も行こうとすると、さっきの巫女さんが俺の袖を引っ張って止めた。

「何ですか？」
「勇者様が行かなくても大丈夫です。ですから早く私たちは城に戻りましょう」
「何言ってるんですか？俺は確かに『魔王』を倒すために呼ばれたかもしれない。
だけど、その前に助けられる人を助けなきゃ始まらないでしょう！」
「で、ですが」
「ですがも何もない！あなたの身は守ります。ですけれど、あの人達も今の俺には守らなきゃいけない人なんです！」

俺は巫女さんに結界を張った後、走り出した。しっかし、ついたらいきなり戦闘とか運ねえな。
俺はゴブリンが落としている石でできた剣を拾うと術をかけた。

「この剣に我が力を。『黒化』」

剣を黒い物が纏い、刀身を構築した。これは何かを媒体する事で、俺の思った物の硬度を作り出す事が出来る。今の硬度は鋼、つまり剣と同じだ。
それで近くにいるゴブリン共を薙ぎ払った。すると簡単に倒れた。うわ、なんじゃこりゃ。弱過ぎだろ？
今度は弓と矢を拾うと、構えた。もちろん弓には術をかけ始める。

「おい、兵士の皆！早くここまで撤退しろ！そいつら全員まとめて吹き飛ばす！」
「わ、わかった。退却、退却！閃光魔術用意！」

ローブを被った魔術師風味の人たちが一気に閃光魔術でゴブリンの眼をつぶしていた。これはやりやすいな。

「我が敵を射抜く力となり、その全てを吹き飛ばせ！『黒爆破』！」

矢が当たった中心点から、黒い色のとんでもない爆発が広がりゴブリンを一気に焼き尽くした。それで俺の初陣は終わった。はあ、雑魚すぎるだろう。

第5話：城に向かって

俺は歩いてさっきの巫女さんがいる場所に向かった。俺が結界を解除すると、驚いた事に凛とした表情で立っていた。しかし姿勢が良いな。

「あの、巫女さん？」
「はい？ああ、もう終わったんですか？」
「いえ、そりゃまあ、終わりましたけど。しっかしやたらと落ち着いてましたね」
「勇者様を信じていましたから。勇者様こそ、大丈夫ですか？」
「え？ああ、全然問題ありませんよ。ところでお名前をお伺いしても良いですか？」

「これは申し訳ありません。私は、このヴァルフェイル王国第3皇女アリシア・ヴァルフェイルです。以後お見知り置きを」

うん、なんとなくそんな空気はしてたけど、とんでもないビックネームだった。あれ？髪に汚れが付いてるな。

「姫様、ちょっと失礼」
「え？」

俺はなぜか懐に入っていた櫛で少しだけだが、髪の毛を梳いた。すると姫様の頬がほんのり紅く染まった。あれ？なんかおかしいかな？

「姫様？どうかしましたか？」
「い、いえ。男の方に髪を梳いてもらったのが初めてだったので」

「それは失礼しました。ところで城に向かうとか言っていませんでしたか？」
「あ、そうでした！ベルフェン騎士団長（ナイトリーダー）！」
「ああ、もうお話は終わったんですか？」
「至急馬車の用意をして下さい。勇者様召喚が成功した事をお父様に知らせに行きます」
「準備はできていますよ。はじめまして、勇者殿。俺はアグルス・ベルフェン。第3師団を任されてる騎士団長だ。今後ともよろしく頼む」
「こちらこそ。俺は輝宮黒谷だ」
「テルミヤ・クロヤ？テルミヤが名前なのか？」
「そういう言い方なら、クロヤ・テルミヤだ。よろしく、ベルフェン騎士団長」

俺は握手をすると、馬車に乗り込んだ。っていうか、この馬車広っ！一体何人乗りだよ？それともあれか、王族ってのはこんなでかい馬車に乗るのが普通なのか？
でも二人しかいないから、スペース余りまくりだな。っていうかこのお見合いみたいな感じ、嫌だな。ホントに姫様って美人だよな。
「それでは、この世界の事を説明させていただきます」
おっと、これは真面目に訊かないと拙いな。俺は居住まいを正して、姫様と真正面で向き合った。

第6話：説明

「……」

あれ～？おかしいな。さっきから真面目な顔で訊こうとしてるんだが、姫様が一向に喋ろうとしないんだけど。

すると耳の辺りが真っ赤になっていた。うん？どういうことだ？

「あの、お姫様？」

「は、はい！な、なんでしょうか？」

「いえ、それはこっちのセリフなんですが。さっきからずっと黙ってるからどうしたのかなと思っただけです」

「えーと」

「ちょっと、失礼しますよ」

俺は前髪を捲り上げると、俺の額を当てた。うーん、熱は無いみたいだけど……。

「もういいです。熱じゃないみたいだし、なんなんだろ？」

「あ、あのですね。単純に綺麗だなと思っただけです」

「綺麗？何がですか？」

「あなたの黒い瞳が、です。意志の強い感じもして、ちょっと見惚れてしまって」

「あ、そうでしたか。良かった、熱とかじゃ無かったみたいで」

「心配をかけてしまい申し訳ありません。

それでは取り敢えず、我が国について説明させていただきます。我がヴァルフェイル王国は、世界で唯一勇者召喚の成功例を持つ国な

のです」
「それは昔に俺以外にも勇者がいた、という事ですか？」
「ええ、そうなります。そしてこの後の段どりになりますが」
「え？説明はもう終わりですか？」

早っ！国の名前と勇者召喚をした事があるって点以外はもうなんでもいいんですか！？

「後の事はもっと詳しい者がおりますので。実の事を言うと、私も詳しくは知らないんです。私は神職を主としておりますから」
「はあ、なるほど？」
「それでこの後ですが、城に到着し正装に着替えてもらった後王に面会していただきます」
「わかりました。それで挨拶したらすぐに出発するんですか？」

「いえ、それは勇者様のご自由にどうぞ」

「はい？そんな事言ったら、俺は国から動きませんよ？」
「それでも構いません。皆の考えはこの国が繁栄する事ですから。でも、願えるのなら」
「願えるのなら？なんですか？」
「この世界に生きる皆を救って頂きたいと、そう思います」

このお姫様はなんだかんだで民の事を考えてるんだ。いい姫様じゃないの。俺達はその後一言も発さずに馬車でゴトゴトと揺られて、城に向かって進んでいった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1932ba/

黒の勇者と白の英雄

2012年1月6日12時29分発行